



# てきすとぽい杯

VOL

9



<http://text-poi.net/>

# 目次

---

てきすとぼい杯について

[てきすとぼい杯について](#)

[第9回 募集要項](#)

[第9回 審査結果](#)

[入賞作品紹介](#)

## 《大賞》

[『父になる日』 碧](#) 獲得☆ 4.500

## 《入賞》

〈有言実行の超大作で賞〉

[『我が家のヒーロー』 晴海まどか](#) 獲得☆ 4.417

[『フィクションメーカー』 犬子蓮木](#) 獲得☆ 4.083

[『かだんのはな』 めぐる](#) 獲得☆ 4.000

〈候補作品〉 ※得票順

[『ヒーロー見参』 雨森](#) 獲得☆ 3.917

[『父さんのスーツ』 Wheelie](#) 獲得☆ 3.833

[『郷土愛』 しゃん](#) 獲得☆ 3.692

〈出目金で賞〉

[『女子高生のおっぱい』 ひこ・ひこたろう](#) 獲得☆ 3.667

[『男はつまらないよ』 松浦徹郎](#) 獲得☆ 3.667

[『Father's suit』 茶屋](#) 獲得☆ 3.636

[『父のスーツ』 鳥居三三](#) 獲得☆ 3.500

〈てきすとぼい杯の未来で賞〉

[『みたびかよたびかわすれましたがしょうせつのかきかたをわすれました。』 ひやとい](#) 獲得☆  
3.333

終わりに

終わりに

てきすとほい広告

奥付



「てきすとぽい」とは

URL : <http://text-poi.net/>

Twitter : <http://twitter.com/textpoi>

てきすとぽいは、2012年2月より製作中の、競作・共作サイトです。

無計画書房に集うWEB作家の有志で開発を進めております。

先日ようやく、投稿・投票・感想・チャットなど最低限の機能が稼働いたしまして、2013年1月より てきすとぽい主催の競作イベント「てきすとぽい杯」を開始いたしました。



「てきすとぽい杯」とは

神様は七日間で世界を創造した。

僕らは一時間で物語を想造する。

てきすとぽい杯は、制限時間1時間+推敲15分で、お題に沿った小説を競作するイベントです。

競作で作品が集まった後は、☆投票による審査、感想コメント、チャット会での意見交換や交流がセットになった、全体としては約一週間ほどのイベントになります。

### 第9回てきすとぽい杯

会場 : <http://text-poi.net/vote/32/>

お題 : 「父のスーツ」

「父のスーツ」をテーマに、小説を書いてください。

お題の言葉は直接使用しなくても構いません。

投稿期間 : 2013年9月21日 22:30 ~ 同日 23:45

審査期間 : 2013年9月22日 0:00 ~ 2013年9月29日 24:00

投稿期間中の Twitter まとめ : <http://togetter.com/li/567034>

第9回は票の途中経過を非公開にしての開催でしたが、計12の作品をお寄せいただきました。

## 第9回募集要項

---

### 【投稿について】

投稿期間：

9月21日（土）22:30 ～ 同日 23:45

制限時間1時間の中に、お題に沿った小説を書いて投稿してください。

お題は、開始時間になりましたら、会場やてきすとぼい Twitter にて発表いたします。

会場：<http://text-poi.net/vote/32/>

てきすとぼい Twitter：<http://twitter.com/textpoi>

お題発表より1時間で執筆、その後15分で推敲&投稿してください。

締切は同日23:45頃になる予定です（お題発表時刻により、若干前後します）。

### 【審査について】

審査期間：

9月22日（日）0時 ～ 9月29日（日）24時

審査方法は☆5段階評価で、てきすとぼいのアカウントをお持ちの方ならどなたでも投票できます。

個々の作品に感想ページもございますので、作品を読んで感じたこと、☆投票では表現しきれない評価など、ありましたらなんでも、お気軽にご記入ください。

票の集計方法：

☆評価の平均で、最も多くの☆を獲得した作品を「大賞」、以降3作品前後を「入賞」といたします。

※時間外に投稿された作品、お題を満たしていない作品も、投票や感想は同じように行えます。

ただ、結果発表の際に、集計対象からは外させていただくことをご了承ください。

## 第9回審査結果

---

【審査結果】 ※得票順、敬称略

1位 ☆ 4.500

『父になる日』 碧

<http://text-poi.net/vote/32/7/>

投稿時刻: 2013.09.21 23:40 最終更新: 2013.09.21 23:43

総文字数: 2243 字

2位 ☆ 4.417

『我が家のヒーロー』 晴海まどか

<http://text-poi.net/vote/32/8/>

投稿時刻: 2013.09.21 23:42 最終更新: 2013.09.21 23:45

総文字数: 4755 字

3位 ☆ 4.083

『フィクションメーカー』 犬子蓮木

<http://text-poi.net/vote/32/1/>

投稿時刻: 2013.09.21 23:19

総文字数: 2126 字

4位 ☆ 4.000

『かだんのはな』 めぐる

<http://text-poi.net/vote/32/6/>

投稿時刻: 2013.09.21 23:37

総文字数: 1279 字

5位 ☆ 3.917

『ヒーロー見参』 雨森

<http://text-poi.net/vote/32/9/>

投稿時刻: 2013.09.21 23:43

総文字数: 1769 字

6位 ☆ 3.833

『父さんのスーツ』 Wheelie

<http://text-poi.net/vote/32/11/>

投稿時刻: 2013.09.21 23:44

総文字数 : 894 字

7位 ☆ 3.692

『郷土愛』 しゃん

<http://text-poi.net/vote/32/12/>

投稿時刻: 2013.09.21 23:45

総文字数 : 904 字

8位 ☆ 3.667

『女子高生のおっばい』 ひこ・ひこたろう

<http://text-poi.net/vote/32/2/>

投稿時刻: 2013.09.21 23:25

総文字数 : 1987 字

9位 ☆ 3.667

『男はつまらないよ』 松浦徹郎

<http://text-poi.net/vote/32/3/>

投稿時刻: 2013.09.21 23:26

総文字数 : 1337 字

10位 ☆ 3.636

『Father's suit』 茶屋

<http://text-poi.net/vote/32/5/>

投稿時刻: 2013.09.21 23:26

総文字数 : 751 字

11位 ☆ 3.500

『父のスーツ』 鳥居三三

<http://text-poi.net/vote/32/10/>

投稿時刻: 2013.09.21 23:43

総文字数 : 1351 字

12位 ☆ 3.333

『みたびかよたびかわすれましたがしょうせつのかきかたをわすれました。』 ひやとい

<http://text-poi.net/vote/32/4/>

投稿時刻: 2013.09.21 23:26 最終更新: 2013.09.21 23:33

総文字数 : 1709 字



※ 獲得☆票の内訳につきましては、てきすとぼい杯の会場にてご確認ください。

会場 : <http://text-poi.net/vote/32/>

《大賞 1 作品》

---

獲得☆ 4.500

『父になる日』

<http://text-poi.net/vote/32/7/>

著：碧

きちんとしたスーツを着込んで、変装をして、仕事へと向かう道中のこと。  
長年コンビを組んできたユーリが唐突に、カタギになる決意を明かす。  
嫌な予感ばかりが疼くまま、理由を聞かされる主人公だったが……。  
後半にかけて急加速する展開と、何気ない仕草の描写が光る、珠玉のサスペンス掌編。  
過去最高となる☆ 4.500 を獲得し、てきすとぼい杯初の大賞連覇作品となりました！

《入賞 3 作品》

---

獲得☆ 4.417

『我が家のヒーロー』

<http://text-poi.net/vote/32/8/>

著：晴海まどか

海外赴任中の父の部屋を片付けていたら……出てきたものは、ヒーロースーツ!?  
ほんの気まぐれに袖を通しただけなのに、何故かそれが脱げなくなってしまって……!  
記録保持中の最多字数を大きく塗り替える、4,755 字の大作で、  
同じく第 8 回までの最高得票を上回る☆ 4.417 という高い評価を獲得しました。

獲得☆ 4.083

『フィクションメーカー』

<http://text-poi.net/vote/32/1/>

著：犬子蓮木

学校でもらった宿題、作文のテーマは「父親」。間もなく父親参観日もある。  
けれど少女の父は、学校の先生やクラスの皆にはとても言えない仕事をしていた――。  
重ねられる嘘と秘密が、逆に、少女の心に潜む本音と矛盾を炙り出す、  
人を描くことに誤魔化しのない物語作品でした。

---

獲得☆ 4.000

『かだんのはな』

<http://text-poi.net/vote/32/6/>

著：めぐる

歌人・梅田敦としての、新人賞の受賞記念パーティを明日に控え、  
短歌の世界に身を投じる事、同じく歌人として生きる父の事に思いを巡らせる、初秋の夜。  
――結末を五七五七七で締めるなど、隅々まで短歌の情趣に満たされた趣深い作品でした。

《特別賞》

---

《有言実行の超大作で賞》

『我が家のヒーロー』

<http://text-poi.net/vote/32/8/>

著：晴海まどか

「次は 4,000 字を目指す」との言葉通り、記録を大きく塗り替える 4,755 字でのエントリーでした。  
第 9 回入賞とのダブル受賞となります！

---

《出目金で賞》

『女子高生のおっばい』

<http://text-poi.net/vote/32/2/>

著：ひこ・ひこたろう

第 8 回エントリー作品（<http://text-poi.net/vote/28/22/>）の続編……かと思いきや、  
著者登場から現実と非現実を激しく行き来する、愉快的な作品でした。

---

《てきすとぼい杯の未来で賞》

『みたびかよたびかわすれましたがしょうせつのかきかたをわすれました。』

<http://text-poi.net/vote/32/4/>

著：ひやとい

第9回てきすとぼい杯の過程と結果を大胆に予測(?)する、不思議な時間感覚を持った作品でした。  
……作中に描かれる通り、しみじみと隆盛していきたいものです。

——受賞された皆さま、おめでとうございます！  
素晴らしい作品をありがとうございました。

(次のページから、作品が始まります。)

投稿時刻 : 2013.09.21 23:40

最終更新 : 2013.09.21 23:43

総文字数 : 2243 字

獲得☆ 4.500

《大賞受賞作品》

父になる日

碧

「カタギになろうと思うんだ」

助手席で唐突にそう言い放ったユーリの表情はいつになく柔らかく見えた。

「……なんの冗談？」

その表情を横目で一瞥して、私の眉は知れず力が入って、寄った。信号が黄色に変わって、ゆっくりとブレーキを踏む。赤になる頃には私たちの車は一旦停止線の手前で穏やかに止まった。

「安全運転だな」

と、ユーリは言う。

「当たり前でしょ、今は私たち、国税局員なんだから」

「国税局員のフリな」

「……そうよ」

言わなくたってわかりきっているはずの、当たり前のことを、わざわざそう訂正する彼の意図がわからず、私は今度ははっきり顔をそちらに向けて、様子を伺った。いくばか自嘲的にも見える、笑みを浮かべて、ユーリはまっすぐ前を見つめている。

スーツは似合っていなかった。見慣れていないだけかもしれないが、20歳過ぎで、どういう因果か、この世界に足を踏み入れたという。今はメイクで見えにくくなっているが、顎の近くに、深い傷が一筋あるのを私は知っている。普段は無精ひげを生やしているが、今日は変装のためにきちんと剃った。身だしなみをチェックしたのはパートナーとなった私だ。徹底的に身だしなみや着こなしを指導したけれど、それでもスーツなんてのは似合わない、と思う。服を着ているのではなく、まるで着られているみたいだ。

そのグレイのスーツの襟元を、ユーリはそっとなぞった。それからふっと、吐き出すような小さなため息をつく。

「悪くねえなって思っちゃったんだよな」

私はなんだか嫌な予感がして、かすかに震えた。その後続く陳腐なお約束の展開が目に見えるようだった。

「スーツ着て、毎日同じ時間にオフィス街に出社する。つまらねえ決まりきった仕事だけど、日に当たる場所で定期的な収入がある。そういう生活を自分がしてることを、想像しちまったんだ」

「無理よ」

思わず口から出た言葉が、案外いつも通りの、何の感情も籠っていないかのような冷たい声で紡がれたことに、私は安心したし、失望もした。

「無理よ。ユーリが今更、カタギのサラリーマン？ ありえない。そんなの無理よ。だいたい、一体自分をいくつだと思ってるのよ。40も過ぎて、人に言えるような職歴もない男を、どんな会社が雇ってくれるっていうの」

「常識的な説教をしてくれるんだなあ」

苦笑しながらそう言ってユーリは頭をかく。それからしばらく沈黙した後、恐れていた言葉を放った。

「一緒になりてえ女がいるんだ」

私が何も言えずにいると、言葉を一度切ったユーリがまた続けた。

「40も過ぎて、なあ。全くだ。年甲斐もなく、馬鹿みてえだろ。でもなあ、ガキが出来たって言われたとき、なんだか、馬鹿みてえな事を願っちゃったんだよ」

私はしばらく言葉を捜していた。何も見つからなかった。40も過ぎた殺し屋は、見た目はもっと若くて、そこそこに女を寄せ付けても不思議ではない整った顔立ちをしている。同じ裏の世界の女と何度かねんごろになり、何人かの本気になった女と揉めた事もあるらしい。そのうちの何人かはユーリが手にかけてことがあるとも聞く。そんな男が、何故、今になって。

「すまねえな」

黙りこんだ私に対して、ぽつりと、ユーリが言った。

「ボスとは話したんだ。誰にも言わずに、今日の仕事が終わったら消えろって言われたんだが、どうしてもお前にだけは言っておきたかったんだよ。コンビ組むようになって、もう、何年だ？」

「6年」

「……6年か。長えよな。赤ん坊が小学校に入るぐらいの年数だ」

その言葉が終わると同時、長かった信号がようやく青に変わった。私はゆっくりとブレーキから足を離し、アクセルを踏む。

\* \* \*

部屋中が死臭で満ちていた。狭い工場の倉庫のあちらこちらに、血痕と肉片が散らばっている。ユーリの仕事はいつも容赦なく、そして完璧だった。絶命した死体から、銃を収める彼に視線を移す。スーツが僅かに返り血を浴びている。こんな事をした人間が、明日から今度は別の綺麗なスーツに着替えて、一般人に紛れ込もうと言うのだから、笑ってしまう。

「ねえ、ユーリ」

「ん？」

声をかけると、軽く喉を鳴らすようにしてユーリが答えた。

「なんで私には、話したの」

問いかけながら、真っ直ぐに彼の顔を見つめる。5人もの人間を惨殺した直後だというのに、彼の表情はまるで穏やかだった。彼は、裏社会の人間だ。カタギになどなれるはずがない。

「……だからよ、お前の事は可愛がってたんだぜ。そうだな、娘みたいなもんじゃねえか。俺がもしカタギの人間で、まっとうな人生送ってたら、お前ぐらいの娘もいただろうなあ」

「結婚」

感慨深げに言う彼を遮って、私は更に問う。

「結婚、今までに、しようと思ったこと、一度もなかったの」

「あ？　なんでそんなこと――」

「ねえ、ユーリ」

それを聞く自分の声が、思っている以上に激しくみっともなく震えたことに、私は失望したし、同時に少しだけ安心した。

「覚えてる？　マナミ・ヤマモトって名前の女のこと」

ユーリがそれに何がしかの反応を示すのを確認するより前に、私は引き金をひいた。6年間彼に仕込まれた技は完璧に決まった。油断しきっていたユーリはこめかみを撃たれそのまま倉庫の冷たい床に倒れこむ。もはや彼が母の名前を覚えていたのかどうか知る手段はなくなってしまった。

「……どうして私に話したのよ」

眩きはむなく倉庫の冷え切った空気に溶け込んでいく。

私が、自分の娘の存在すら知らずに生きてきた父から教えられたのは人の殺し方で、最期に着ていたスーツは血を浴びていた。

※作品集への掲載にあたって、誤字等を一部修正しました。

投稿時刻 : 2013.09.21 23:42

最終更新 : 2013.09.21 23:45

総文字数 : 4755 字

獲得☆ 4.417

## 《入賞作品》

《特別賞・有言実行の超大作で賞》

## 我が家のヒーロー

晴海まどか

実家の引越しをするので片づけを手伝え、と母親から命令された。ちょうど大学の夏休み中で、サークルにも入らずアルバイトに精を出すくらいしかやることがなかった俺に断る理由はなかった。

父は海外赴任中で、実家には母が一人で住んでいた。俺が一人暮らしをする前、実家に住んでいた頃は父もまだワシントンに行く前で、なんとも狭苦しく小さい家だと常々思っていたものだが。母一人には家は広すぎるように思えた。元来母はきれい好きで、何かと散らかす俺と父がいないので部屋はがらんとしていた。

久しぶりに帰ってきた俺を迎えた母に、「引越しなんていつ決めたの？」と訊いた。

「まったく訊いてない気がするんだけど」

「そりゃ、この間初めて言ったんだもの。急に決まったのよ。来週には引っ越すわ」

「どこに」

「東京」

純粹に驚いた。

「家賃払えるの？」

「お母さんの仕事の都合だから大丈夫」

「……っていうか、いつから働いてるんだよ」

「この半年くらいかしら。さあさ、時間もないし、とりあえずお父さんの部屋、片づけておいてもらえる？」

お父さん、引越しまでには帰ってこれないし、荷物は全部詰めちゃっていいから」

なんだかよくわからないが、俺は二階の和室にある父の荷物を整理することになった。段ボールはすでに山のように用意され、廊下を半分塞いでいた。

八月に入ったばかりで、冷房をいくらきかせても体を動かしていると汗がとめどなく流れた。本棚に並んでいた小説やら新書やらを適当に詰めるのは三十分足らずで終わり、次は衣装ケースの中身に着手することにした。

「……なんだこれ」

衣装ケースの中で、礼服やグレーのスーツになんとか異様なものが混じっていた。蛍光グリーン――ミ



ントグリーンとでもいうのか——で、てかてかした素材。

引っぱり出して、絶句した。

よくある五レンジャー的な、戦隊ヒーローにありがちな、全身タイツのようなスーツだった。

背中の部分にファスナーがあり、そこから体を入れるようになっているらしい。胸元には反射板のような素材でVの字の模様があり、頭の部分はつるんと丸く、目元は黒いサングラスのようになっていた。内側から見てみると、視界は思ったよりもクリアだ。口元も生地が薄くなっていて、呼吸しやすいようにかメッシュ素材になっていた。

なんだこれ。なんなんだ。

そのとき、階下から母が呼ぶ声がした。

「お昼ごはん用意してあるから、切りがいいところで下りてきなさい」

子どもの頃みたいだな、なんて思った俺は、このとき子どもの的な発想を思いついた。これを着て行って、母を驚かせてやろう。

Tシャツとジーパンを脱いで、トランク一枚になって戦隊スーツに両足を入れてみた。スーツの足の部分はブーツになっていて、普通に靴を履いているのと変わらない感触だった。よくできている。そのままスーツを腰まで引き上げた。ぴったり。父は俺よりも五センチ以上身長が低かったはずだが、足の長さは一緒だということなんだろうか。ちょっと悲しくなったが、俺はめげずに両腕、頭とスーツを着て、手を背中に回してファスナーを上げた。

スーツは伸縮性に優れているのか、俺の体に完全にフィットした。

この真夏にこんな全身タイツを着るなんてどうかしていると思いつつも、スーツを着てもまったく暑さを感じなかった。通気性もいいのかもしれない。

俺は意気揚々と階段を下り、母が待つリビングに顔を出した。

「……いい年して、何やってんの」

母の視線は思いのほか冷たく、スーツの中で顔が熱くなった。おっしゃるとおりでございます。

「それ、お父さんが宴会芸で使ってた奴ね。それじゃ、焼きそば食べられないでしょ。早く脱いできなさい」

しょんぼりと俺は二階に戻り、スーツを脱ごうとして背中に手を回した。が。

手に、何も引っかからない。

鏡の前に立ってみたり、しゃがんでみたりしたが、両手は背中の上をつるつると滑るばかりだった。

背に腹は代えられず、俺は再び一階に戻り、恥を忍んで母に助けを求めた。が。

「これ、どうやって着たの？」

ウケる、なんて、母はケラケラと笑いだしてしまった。

「面白いからこのままでいなさいよ」

なんて、冗談じゃない。

「脱ぎ方わからないなら、お父さんに訊いてみれば？」

時刻は正午を回ったところだった。父がいるワシントンとの時差はマイナス十三時間。俺は迷わず母に聞いた電話をかけた。

「スーツの脱ぎ方あ？」

久々に話す父は、いやに陽気だった。もともと口数が多いタイプの人間ではないのに、最近どうだ、彼女はできたか、なんて饒舌に訊いてきた。酔っているのかもしれない。ワシントンは今午後十一時だ。

「そりゃ、正義のヒーローのスーツだ。決まってんだろ」

父はもったいぶったように少し間をおいた。

「人のためになることをしなきゃダメだ」

……は？

「人助けをしろ、人助け。実はな、そのスーツ、お父さんが若い頃、宇宙人にもらったものなんだ」

何を言っている、この酔っ払いは。

「宴会芸で使った奴だって聞いたけど？」

「何を言う！ それは、人助けをするためのスーツだ。だから、一定量の人助けをしないと脱げない仕組みになっている」

俺は反応に困ってしまい、答えられないでいたら「じゃ、がんばれや」と電話は切れてしまった。おい、とかけなおすが出る気配はない。

父の話を変えたら、へえ、と母は笑んだ。

「面白いじゃん。人助けしてきなよ」

おい、夫婦揃って何を言っている。

「人助けしてたら誰かが助けてくれるかもよ？」

母はぴしっと俺を指さした。人をやたらと指さすのは母の昔からの悪いクセだ。まあ、それはともかく。ちょっと待て、その前にお前が助ける。

なんて抗議する間もなかった。これも修行の一環だ、なんて、母はレンジャースーツ姿の俺を家の外に追い出してしまった。ぴしゃりとドアが閉められ、鍵までかけられてしまう。

困った。

人が多くない片田舎の住宅街だったのがまだ救いではあった。この格好で渋谷のスクランブル交差点にでも放り出されたらたまったもんじゃない。とはいえ、どうしたものか。

人助けをすればいいのか。

なんて、思ってから地団太を踏んだ。ふざけるな。

と、そこで俺は名案を思いついた。父には悪いが、ハサミでこのスーツを切らせてもらおう。

実家住まいを続けているはずの地元の友人何人かの顔を思い出し、俺は颯爽と駆けだした。

駆けだして、五分も経っていなかった。

道の真ん中で、小さなおばあさんが倒れていた。

「大丈夫ですか？」

思わず声をかけ、顔を上げたおばあさんが俺の姿を見て目を丸くして、自分の格好を思い出した。逃げ出したい。が、倒れているおばあさんを見捨てるわけにはいかないし。

転んで足を挫いてしまったというおばあさんを俺はおぶり、家まで届けてあげることにした。

おばあさんの家はすぐ近くだった。娘さんご夫妻が、あらあらまあまあと俺を迎えてくれた。

「なんてお礼を言ったらいいのか……」

「いえ、ただの通りすがりのヒーローなんで」

それでは、と俺は再び駆けだした。自分でヒーローなんて言ってしまったことが恥ずかしかったが、まあよし。

道行く人が、俺の姿を見て目を丸くする。女子高生には笑われた。ああもうくそ、どうせ俺だってわからないんだからどうにでもなれ！

友人の家まであと少し、というところで、小学生くらいの女の子に遭遇した。

「助けて！」

嫌な予感しかしない。

「ミーコが下りてこないの」

女の子は民家の塀の上を指さした。首輪をした、茶色い猫が座っている。

「ヒーローなんだから助けてくれるでしょ!？」

ヒーローなんかじゃないと主張したかったが、色々面倒なので俺は猫に手を伸ばすことにした。が。

猫は俺の気配を察したのか、猫はふんっと俺を鼻であしらうような顔をして塀から飛び降り、駆けだしてしまった。

「早く追いかけて!」

女の子に命令されるまま、俺は猫を追いかけた。くっそう。

猫は飼い猫であることを主張するかのようにぶよぶよに太っているのに、足は驚くほどに早く、見失わないようにするので精いっぱいだった。角をいくつか曲がり、あれ、と俺は足を止めた。見失ってしまった。

ま、小学生の女の子もついでにまいてしまったようだし、もういいか、と思ったところで気づいた。

俺は町内に数えるほどしかないコンビニの駐車場に立っていた。そして、ガラス張りのコンビニに視線をやって。

コンビニ強盗を目撃した。

覆面姿の男が、包丁をレジのお姉さんにつきつけていた。客も二人くらいいたが、主婦と中学生くらいの少年で、包丁を持った体格のいい男に手出しできないようだった。

これは、まずい。警察に通報しなくては。

と思ったところで、気づいた。携帯電話が手元にない。

でもってさらに悪いことに、青い顔をしたお姉さんが、こちらを向いた。

「あ」と言ったのがその口を見てわかった。強盗も、お客さんもこちらを向く。

……ああもう、どうにでもなれ。

戦隊スーツを着て、ヒーローだなんて名乗ってしまって、もしかしたら俺は舞い上がっていたのかも知れない。うおおお、と声を上げ、コンビニの自動扉をくぐり、中に突っ込んだ。

この真夏だというのに毛糸の覆面をした強盗が、まっすぐに俺に包丁を向けて突進してきた。が、正義のヒーローが包丁などで屈するものか!

俺の体は、俺の意思など関係なく、ふわりと浮いた。くるっと回って強盗をやりすごし、覆面の頭に蹴りを一発入れてやる。

うがっ、と強盗は呻いて倒れた。

沈黙。

次の瞬間、コンビニは拍手と歓声でいっぱいになった。正義の味方だ! ヒーローだ! ありがとうございます! なんて……照れる。

と、てへっと照れた俺は、自分の足元を見て、気がついた。

浮いている。足が十センチくらい、床から離れている。

今更ながら、父の言葉がよみがえった。宇宙人からもらったスーツ。俺が空なんて飛べるわけではない。

まさか……本当に?

と、そのときだった。

茶色い猫が駐車場の方に現れた。はっとして俺はコンビニの外に出て、猫に抱きついた。猫はふにゃー、と不満を漏らしたが大人しく俺に抱かれている。

少し遅れて、小学生の女の子がやってきて、猫を抱えた俺に気づいて嬉しそうな声を上げた。

「ありがとう!」

俺はしゃがみこんだまま、女の子に猫を返した。と、猫を抱えた女の子が俺の背中を覗き込んだ。

「ファスナーがあるの？」

女の子は俺の許可も得ず、ファスナーに手をかけ、そして一気に下ろした。

……脱げた、のか？

「よっしゃああ！」

脱げかけのスーツを着たまま、思わず立ち上がってガッツポーズをした。が、気づく。

さっき俺、浮いてなかったか？

そのときだった。目の前に、ピンク色の何かがふわりと着地した。ふわっとしたスカートのついた、ピンク色の正義のヒーロー。ピンクレンジャー。

「ま、初めてにしては合格ね」

ピンクレンジャーのその声は、あまりに聞き慣れたものだった。

「ちょっと待て……ちょっと待て！　なんで飛んでんだ、オフクロ！」

「実はね、今の職場って、結婚前に働いてたところなの。言わなかったっけ？　お父さんとの出会い」

知っている。会社の宴会で酔っぱらった父を、通りすがりの母が介抱したのがきっかけと聞いた。まさか。

「宴会芸で戦隊ヒーローの格好してるお父さんに惚れちゃって、私、現役のヒーロー引退したの。でも、お父さんもないし、またやるのもいいかなって。引っ越しもその都合。組織の本部が東京にあるの」

ピンクレンジャーはスカートをふりふりさせ、てへっと笑んだ（ように見えた。実際は表情は見えないけど）。

「現役のヒーローって……」

「そういう能力がある一族なのね、私の家系。だから、あんたにもその素質があったってわけよ」

ピンクレンジャーはすっと俺に手を差し出した。

「どう？　私と一緒にアルバイトしない？　今、人出が足りないの。あ、もちろんお父さんには秘密ね」

投稿時刻 : 2013.09.21 23:19

総文字数 : 2126 字

獲得☆ 4.083

《入賞作品》  
フィクションメーカー  
犬子蓮木

わたしのお父さんはさぎしです。

ほんとうはおしごとしていないのに、人をだますためにべんごしになったりせいじかになったり、しゃくしょの人になったりします。

お父さんは「おれのしごとどうぐはスーツだけさ」とよく言います。

とても高いものらしいです。わたしに服なんかとは何十倍もちがうんだぞって行っていました。人をだまして買ったお金で高いスーツを買って、それを着て、また別の人をだましにいきます。

お父さんはだまされるほうがわるいんだとよく言います。

わたしはそうなのかはわかりません。だまされる人がかわいそうじゃないかなとか思うこともあります。

でも、わたしが学校にかよって、ミナちゃんや高木さんと遊んだり、お勉強をすることができるのはお父さんのお金のおかげなので、もんくを言ったりはしません。

わたしはわるいお金だとわかっていても、ごはんも食べたいし、おもちゃで遊びたいです。この前のたんじょうびに、お父さんがプレゼントを買ってくれたときも、わるいおかねで買ったんだってわかりました。がうれしかったです。

なに書いてるの！

少女は思う。こんなこと書いちゃいけないってわかってるのに。

机に座っていた少女は作文を書く手をとめた。学校でもらった原稿用紙を、そこまで書いていたものをまるめてゴミ箱に投げる。まるまった原稿用紙はゴミ箱にあたることもなく外れて床に転がった。

少女の父が詐欺師だなんていうのは当然、周りには秘密だった。バレたら少女の父親は捕まってしまう。だから内緒にしなければいけないと少女はじぶんの小さな身体の中にぐっと秘密をためこんでいつも生きていた。

お母さんが出て行かなければよかったのに。

少女の母親は、別の男と愛し合って、二年前に家を出ていた。父親に対して、「お金が稼げそうだから結婚したのに、リストラとかありえない」と冷たい言葉を残して。

そのとき、父親は騙されたと感じた。

だから、今度は人を騙してやるのだと父親は思ったようだ。

決心は、人を変えることがある。大きな悲しみがあればなおのこと。そして、少女の父親は働いていたとき以上のお金を、より少ない時間で得る方法を身につけたのだ。

きっと才能もあったのだろう。

きっと壊れていたのだろう。

少女の気持ちに気付かないフリをして父親は人を騙すということが続けていった。

「なんの宿題だ？」勉強部屋を見に来た父が少女に声をかける。

「作文。遠足にいったときの」

少女は嘘をついた。本当は父親参観日に読む、父親についての作文だったのに。

もちろん参観日についても言っていなかった。父親はそういったことにまともに興味を持つとはしないし、もし聞かれても少女は嘘をつく。

少女は自らの嘘の上手さを自覚していた。

父というお手本が目の前にいて、母という父を騙していた存在も知っていて、その両者の血のつながりを自覚している少女は、自分もそんな人間なんだと認めていた。もしかしたら、才能の遺伝などなく、ただ人よりちょっとだけ会話が上手なだけの女の子でいられたかもしれないのに、認めねばならないような環境により、ほんとうにあるのかもわからない嘘の才能があるのだ、と少女は思い込んでしまった。思い込むことが少女の成長につながった。嘘をつくという能力の。

少女は作文を最初から書き直す。

どんな職業がいいかな。ほんとうのことを書かなくていいなら、作文なんて簡単に書ける。少女はそう思ってくすくすと笑った。

わたしのお父さんはトラックのうんてんしゅさんです。

おしごとがあるときは何日もなくなります。たいへんだなと思いますが、おしごとがないと何日もずっと家にいてじゃまだなあとよく思います。できればずっとおしごとで外にいてほしいと思っていました。だけどこのあいだこんなことがありました。

わたしひとりがおるすばんをしていた夜にまどのガラスががたがたしたのです。とてもこわくなっておふとんのなかでふるえていて、それでもこわくてお父さんにでんわをしました。

そうしたらすぐにかえってきてくれたのです。

わたしはお父さんのかおをみて泣いてしまいました。すぐにきてくれたのがうれしかったのです。そしてあそこのガラスがゆれてこわかったと話したら、お父さんが言いました。

「あ、それおれだわ」って。

お父さんは家のかぎをなくしたらしくわたしの部屋の窓をゆらしていたらしいです。

やっぱりお父さんは家にちかづかないでほしいと思いました。

でも、わたしはそんなお父さんがだいすきです。

少女は簡単に作文を書ききった。嘘を並べて。父親は詐欺師で、少女は嘘つきで、嘘ならなんだってできるんだ、と思っていた。ああ、嘘で書くのってなんて楽なんだろう、と思っていた。

だけど少女は気付いていない。

いくつも職業があるなかで選んだものがトラックの運転手であることを。

サラリーマンはイヤだった。

弁護士も役所の人も政治家だなんてイヤだった。

スーツを着る可能性のある職業なんて書きたくないと無意識に選んでいた。

空は暗く、未来はわからず、過去は楽しかった。明日は笑っていて、明後日も笑っていて、きっと来年だって笑っているだろう。だけど、それが本心からかはわからない。

少女は生きていく。

壊れそうな心を守るためと。

嘘ついて。

投稿時刻 : 2013.09.21 23:37

総文字数 : 1279 字

獲得☆ 4.000

《入賞作品》  
かだんのはな  
めぐる

歌人・梅田敦の新人賞受賞記念パーティが明日に迫っている。

その梅田敦というのが私の筆名なのだが、今になってなぜ男性の名前で短歌を始めてしまったのだろうと後悔している。

苗字だけ変えればよかった。それだけでも十分気は晴れたかもしれない。なにも性別まで変えなくても。大学のサークルで短歌をやっていた時に「あなたはやけに雄々しい歌を詠むのね」と言われたのが事の始まりだ。

溜息をついてうなだれても筆名は変わらないし、パーティは中止にはできない。

気晴らしにと縁側の戸を開けるとずいぶん涼しくなった夏の終わりの風がゆるやかに吹く。

この空気を汚してはいけない気がして、くわえかけた煙草を箱に戻し灰皿を遠ざけた。

草むらにひそむ虫の声を聞くとセミのうるささが恋しくなる。ひぐらしが鳴くような田舎ではないので今年はまだセミの鳴き声は聞けなさそうだ。

もしかして竹中先生に言われたことは始まりではないのだろうか。そんな風に言われるような歌を作っていた時点で、私の反抗は始まっていたのだ。

この縁側で気難しい父が更に気難しい雰囲気をもとめて、よく短歌の推敲をしていた。

父・松本久司は草稿から随分流れを変えるのが好きで、よく編集者と言いつきをしてきた気がする。

私はなるべく血を隠すように生きようと思った。人と人が意見を交わすのは素晴らしい事だと思ったけれど、父のそれはまるでドリルで相手を貫かんとするようなお堅い人であったから。

しなやかに人と混ざり合うならば女性の感性そのままに歌えば楽だったかもしれないが、イマドキの後ろから蹴ったら倒れそうな男性に異を唱えたかったのもあった。そうして父の歌とはまた違う男性像で梅田敦は歌壇を渡っている。

「まだ寝ないのか」



歳を取って早寝早起きになってしまいあのドリルの勢いも衰えてしまった父が、あくびをしながら台所から声をかけてきた。

今でも歌人として仕事を続けてはいるが、昔のような縁側の使い方はしていない。

明日のパーティには誰かからの招待で参加するという。母親似の顔であるから、親子であるというのは気付かれないだろう。

「スーツを出しておくわ」

立ち上がって煙草をポケットにしまい、振り返って父を見た。

そろそろ背が縮み始めると思って何年経つだろうか。長身というほどではないが、スタイルを維持しているせいか同年代の男性よりも大きく見える。

「ドレスは買わなかったのか」

「オカマと思われても嫌だし」

それ以上は何も言わず（おやすみすら言わずに）寝室に入っていった。

好きでないのなら同じ歌人にならなければよかったのに、私は新人賞を頂くまでの筆名を持ってしまった。父を苦手にしながらも、どこか追い求めているのだろうかという考えは何度もしたことがある。

梅田敦はこれからどうなるのだろうか。パーティで編集者なり審査員の先生方なり、手がかりを与えてくれるといいのだが。

「数学と違って答えは一つではない」よく聞く言葉を最初に聞いたのは父からだった。

今日はこれ以上考えていると明日に響きそうだ。梅田敦から松本七恵に戻って眠るとしよう。

新品の自前のスーツと並ばせる父のスーツは少し小さい

## ヒーロー見参

雨森

僕にとって父とは、二面性を持ったちょっと名状し難い存在だ。夜はいつも酒で、前後不覚になるような飲み方しかできないだらしない男、そして昼の姿を僕が観たのはもう二十年ちかく昔の話だ。

その父がまだ五十歳という若さで脳梗塞に倒れ、右半身不随となったのは僕がようやく社会人として自立した頃だった。母からの連絡によって急遽帰省し、駆けつけた病院で僕が眼にしたのは痩せ細り、顔の半分をだらしなく崩した夜の姿の父がいた。

「すまん」

父はそれだけ言うと口をつぐんだ。もっと話す事があるのだろうが、うまく発語できないもどかしさからか、父の唇が微かに震えていた。

いって、と僕は答えたものの腹の中では当て所のない怒りがあった。父は深酒のために身を滅ぼそうとしていた。

父は五十歳になるまでスーツアクターとして数々のヒーローや怪獣を演じてきた男だった。父が陰ながら名演した映画は何度か僕も見ている。

それが、結局は酒のために降りざるを得なくなった。身体を自在に動けない父はスーツアクターとして舞台上に立つ資格を失ったのだ。酒を飲む夜の父が、ヒーローであった筈の昼の父を打ち負かしてしまった。その事に、自分でも思いがけず僕は怒っていた。

父の治療はリハビリへと移行し、入院期間は当初の一ヶ月から二ヶ月に伸びた。その間、僕は見舞いのついでにちよくちよく実家へ立ち寄った。

母は父に罹りっきりだったので家には誰にもいない。その隙に僕は父の部屋へと忍び込んでいた。父の仕事道具の類は家には置いてないが、会社から譲り受けたというスーツが一着だけクローゼットに掛けられてあった。僕はそれを殴った。もうこの怒りをぶつけられる父は存在しない。病院にいるのは父とは全く違う人間だ。ならば僕が殴るべき相手はヒーローだった頃の父が身につけていたスーツしかなかった。

掛ける言葉もなくビニール製のスーツを殴っていると廊下の置き電話が鳴った。慌てて廊下へ出て、受話器を取ると相手は父の勤め先のプロダクションからだった。新しい役が決まったので入社して欲しいという内容だ。父が倒れた事など全く知らない様子だった。

すぐに僕は違和感に気付いた。父が倒れたあの夜、父はヒーロー物のコスチューム姿だったという。仕事中に倒れたのなら、なぜ会社の間が気づかないのだろう。僕がその事に触れると受話器の声の主は気まずそうに真相を語った。

「――お父上は一年前にウチとの契約を切られてたんですよ」

「もしかして、酒ですか？」

間髪入れずそう聞くと、ええまあと男の声が言葉を濁した。僕は更に尋ねた。

「じゃあ、ここずっとスーツを着る仕事なんてなかったんですね？」

受話器の声は少なくともウチじゃありませんねと答えた。ややあって、僕は受話器を置いた。

「ヒーロー見参」

父は理学療法室病室の片隅で足の運動をやっていた。僕へ振り向いたその顔には驚きがあった。

「母さんから全部聞いた」

父に付き添っている PT の先生が不審げに僕を見ていたが、構わず言った。

「本当は外傷性の硬膜下血腫だったって事も、夜に自警団まがいをやった事も全部ね」

「――すみません」

父が片手で先生に拝むと PT の先生が十分だけ休憩しましょうと気を利かしてくれた。

院内の休憩室で、僕はペットボトルのコーヒーとお茶を書い、キャップを外して父へ渡す。

「隠すつもりはなかったんだが」

父なりに一生懸命話そうとしてか言葉が乱れていた。

「バットマンじゃあるまいし――」

僕もこれ以上言葉が出ずに慌ててコーヒーを飲み込んだ。父が右手で左手を支えながらお茶を啜る。

「このままじゃダメだと、思ってたんだ」

「それで自警団まがいだよ」

またペットボトルを傾ける

「長いこと生きてるうち、大事なものが失くなっていく感じがしたんだ」

父はボトルを椅子に置き、左の掌を握りしめた。

「奮い起こしたかった。まだまだ俺はやれるって」

「ヒーロー見参！」

突然の大声で休憩室内が静かになった。そこに居る人々の視線が注がれているのを感じる。父だけは僕から視線を外して俯いた。

「――お前が小さい頃、よくやったな。あれ」

「言っとくけど、後継いだりしないから」

初めて父が僕の眼を見た、そんな気がした。

「リハビリ頑張ってよ。ヒーローなんだからさ」

ペットボトルの上をつまみ上げると僕は父の顔を見ないようにして、そのまま休憩室を出て行った。

## 父さんのスーツ

Wheelie

破損した強化服を予備のもの（それは若干機能の劣るものではあったが）に着替えながら、父は僕に指示を出す。ここで待機して仲間の補給を待つこと。通信は常にオンにしておくこと。

「六時には戻らなきゃならない。母さんを待たせているからな」

時計を確認する。もう五時に近づいていた。

「そんなに早く終るの」

「大丈夫」

短い返事をして父は南に向かって走っていった。スーツの倍加機能により加速された父はすぐに草原に埋もれて見えなくなった。

僕は銃弾の残数を確認する。草原に一人座り込み、それから父の強化服の修復を試みる。

「綺麗な空だなあ」

つい、声が漏れる。

「戦場に似つかわしくないか」

インカムから父の声が聞える。僕にとっては初めての戦場。知らない国の草の色。どこまでも続く青空。

東の地平線が光る。

「敵兵！」

十人、いやそれ以上かも知れない。相手はまだ僕に気付いていない。

「草の中に伏せろ。父さんのスーツは？」

「修復……できていると思う」

「今すぐそれに着替えて、それから逃げるんだ」

這いつくばったまま強化服に着替える。

「南へ！」

父のいる方角へ全速力で走る。敵兵に見つかる。彼らは追いかけてくる。僕はなぜだか母のことを思い出す。今日の夕食は、グラタンだって言ってたっけ。

どーん！

インカム越しに爆発音。僕は自分が撃たれたことを確認する。まだ大丈夫。強化服は破損していない。

「反撃するよ！」

「だめだ逃げろ！」

もう逃げられない。敵の方が足が早い。振り返り敵兵に狙いを定める。何度もの閃光と爆発音。

「父さん……？」

敵兵は全滅していた。父の強化服は僕をなんとか守ってくれた。だけど引き返してきた父は……。

「父さん、死んじゃったの？」

「うん」

インカムから父の声が聞こえる。

「カッコいいところ、見せようと思ったのになあ」

父の体が光とともに消える。

父が子供部屋の扉をノックする。

「どうだった？ はじめての戦場」

「父さんのスーツのおかげで助かった」

僕はインカムを外して、父の方を向く。

「あの装備、高かったからなー。まあいいや。おかげで夕ごはん間に合う」

僕はパソコンの電源を切り、父と一緒に部屋を出る。台所からはグラタンの焼ける匂いがしていた。

※作品集への掲載にあたって、誤字等を一部修正しました。

## 郷土愛

しゃん

リュウケンの父親はキジムナーだから、いつもガジュマルの葉を腰に巻いている。  
上半身は常に裸で、サンダルをはくことさえない。  
リュウケンは長い間、それがキジムナーの正装なのだと思ってきた。  
キジムナーをモデルにした、スーパーのキャラクターも似たようなものだった。

「で、リュウケンよ」

父はある日のこと、サトウキビ畑の片隅で相談事を持ちかけた。

「で、って？ で、って何？」

「そんなことは、どうでもいいさー。お前も知ってのとおり、この島はまだ暑い。内地のように、秋が来るなんてまだ先だ」

「俺は、ずっと夏のほうがいい。冬はこの格好では、少し寒いしさー。ま、キジムナーだから、我慢するしかないけれどー」

「そう。いくらキジムナーでも、冬まで裸では風邪ひいてしまうさー。だから、たまには服を着るのもいいんじゃないかと思うんだけどー。この間、旅行者にくっついてた妖精がな、しゃれたもん着ていたさー。こっちじゃ、役人までかりゆしだけど、あれはかっこいいさー。うちらもイメチェンっていうのか？ そんなのしてみてもいいと思うんだが、お前はどうよ？」

「イメチェン？ 服？ 何言っているさー。キジムナーが服なんて着たら、叱られるに決まってるさー」

「叱られる？ 誰に？ お前、勘違いしているかもだけど、キジムナーが裸なのは金がないからさー。金さえあれば、服着たって誰からも文句ないさー」

父はそう言うと、腰に巻いた葉から商品券を取り出した。

「いやさ、妖精も長くやっていると、たまにはいいことあるものさー。1000歳の誕生日に、お頭様からこれもらったさー」

\*            \*

電博堂沖縄支局の夜は長い。

一人きりになったオフィスの中で、プランナーの佐竹は溜め息をつきながらモニタを眺めた。

土台、沖縄でスーツを売ることなど無理なのだ。

独り言をつぶやき、遅々として進まない企画書を睨みつける。

クライアントからのリクエストは、キジムナーを主役にしたスーツのCMを作ること。

期限は、あと十二時間。

徐々に夜が明けていく窓を前に、佐竹はひらめいた。

キジムナーだけに、生地が無一。

裸の王様をからめてみようかと思いつが、またダジャレ落ちかと叱られると気付いたのは、朝を迎えた後のことだった。

《出目金で賞》  
女子高生のおっばい  
ひこ・ひこたろう

仕事を終えた私が家に帰っていると、向こうから女子高生らしき人物が走ってきた。その背後には彼女を追っていると思われる数名の男。

「この子も出目金にさせられちゃうのか？」と思いつつ、そちらの方というか、自宅の方に歩いていると、「お父さん、助けて！」と言いながら、女子高生が私の腕にしがみついた。

彼女を追っていた男たちは、

「はあ？ いきなりスーツ姿のお父さんの登場かよ」

「クールビズ無視の展開かよ。今、何月だ言ってみろ」

などと、訳のわからないことを好き勝手に口走った。

「いつもは未来のお姉さんが助けてくれるのに」とつぶやきながら、女子高生は私の腕を離さない。「一応、お父さんの振りをしてください。相手が躊躇するかもしれないから」

胸の膨らみが私の上腕二頭筋を刺激してやまないのだが、「お父さん」と呼ばれるシチュエーションでは、その感触を楽しむのも気が引ける。未来のお姉さんとやら、早く出てこい。さもなくば、この男ども、さっさと消えてくれ。

「何だよ、てめえはよ」といらつく男たちをなだめようと、私は AKB っぽい自己紹介で、

「たかやま、かずひこー♪」と自分の名前を JR 東日本の接近音楽のメロディーに合わせて歌ってみた。

ダメだ、全然受けない。こいつら、JR 東日本とは無縁なのか。では仕方ない。別なバージョンでやろう。

「たかやーまだ、たかやまだ、やまだじゃないよ、たかやまだ♪」

すると、私の目の前の空気が何やらもやもや揺らぎ始め、さらに光を放ったかと思うと、若い女性がいきなり登場した。

「未来のお姉さん！」と女子高生が嬉しそうに叫ぶ。しかし、自己紹介を途中で中断させられた私としては、どうしていいのやらわからない。これからがいいところなんだけど。

「おい、どうするよ」



「ここはずらかるうぜ」

男たちは何やら弱気な相談をしている。未来のお姉さんの登場が効いたと見える。

「高山和彦だってさ」

「こいつに怪我でもさせたら、未来はねえぞ」

いや、何だかおかしい、やつらは私の話をしているのか、それとも未来のお姉さんの話をしているのか？

「また痛い目に遭いたいの？ あなたたち、さっさと戻りなさい」

未来のお姉さんがようやく口を開くと、男たちは

「覚えてろ」などと言いながら、すーっと姿を消した。

おお、何てわかりやすい悪役どもなんだ。

「大丈夫でしたか？」とお姉さんが私に聞く。

「えっ、俺が襲われようとしてたの？」

襲われようとしてたのは、この女子高生の方ではないのか。おい、手を放せ。じゃなくて、もうしばらくそうしてくれても構わないぞ。

「いえ、話せば長くなるんですけど」

そう前置きして口を開いたお姉さんの話は本当に長かった。

近い将来、人類は不死不老を手にする。人々は自分の希望する年齢で成長をとめ、その年齢の肉体を半永久的に保持できる。つまり、自殺を除けば死ななくなる。寿命も延びる。その一方で人口抑制のため出産は認められず、人々は寿命が長いものだから、恋人や配偶者に対しても、一生連れそうという感覚をなくしてしまう。そして、いつかは今の恋人と別れるだろう、とか、今度の恋人はこの人になるかも、と思うと、簡単に浮気を経験するようになる。何万年も生きるようになると、性の価値観も狂ってしまうようなのである。

そんな中、「涼宮ハルヒ」や「あまちゃん」に興味を抱いた「処女ハンター」と呼ばれるアウトローたちが、時空を旅してこの時代の女子高生を手ごめにしようと暗躍し始めた。未来のお姉さんはそういった男どもの犯罪を防ぐ民間組織に所属しているとのことである。

あー、しんど。

「で、高山和彦の件なんですけど」

「えっ、まだ続くの？」

何でも私は2018年に、決死隊を率いて福島第一原発の燃料棒が地下水に直接接触するのを防ぐらしいのだ。これは英雄的な行為として未来の教科書にも載っているらしい。大河ドラマでも何度も放映されているとのこと。私を傷つけると、福島原発の災害がさらに広がる可能性を、男どもは危惧したようなのである。

「たぶん、俺はそこで死ぬんだろうな」

まだ一度も足を踏み入れたことのない、福島のアタタ山だったか、そんな名前の山の名を思い出しながら、いや全然思い出せてないけど、私はつぶやいた。

そこでちっとも否定してない未来のお姉さん。そうか、私はやっぱりそこで命を落とすのか。これが人生最後の女子高生のおっばいになるのか……。あれ、女子高生のおっばいなんて、人生最初の珍事だぞ。もっと喜べ、高山和彦！ あと5年の命なんだろうけど。東京オリンピックも見られないけど、喜んどけ！

そんなこんなで家に帰った私は、一応ネットで自分の名前を検索してみたのだが、「福島決死隊」のメンバーの中に東芝の原発技術者であった同姓同名の男性の名前を見つけてしまったのであった（ここだけ実話）。

いや、やっぱり私が死にます。女子高生のおっばいとひきかえならば……。

## 男はつまらないよ

松浦徹郎

真っ黒な父さん。華やかな母さん。

日常で、親戚の結婚式で、おじいちゃんのお葬式で。

どんな服を着ても、必ず父は黒く、母は様々な色を使いこなしているように見えた。

男はつまらないな――。

漠然と、そう思っていた。

私服だった小学校ですら、華やかさという意味でもヴァリエーションという意味でも、男の子の服はモノトーンだ。

中学の制服に至っては、もうほとんど差別といってもいい。セーラー服が紺を基調としつつも赤いタイや、白のラインが使われているのに、学生服は黒一色。墨汁をこぼしても、そのまま着られてしまうほど実用一辺倒だ。

高校はブレザーの学校だった。ようやく服らしい服が着られると喜んだが、男子の制服がワイシャツネクタイにブレザーだけだったのに比べ、女子の制服はリボンとタイが選べたりと、オプションが充実していた。また差をつけられた気分だった。

こうして長い時間をかけて、服飾に関する劣等感と執着心を植え付けられた結果、大学ではじけた。

つまりは、おしゃれは正義という感じで大学生活のスタートを切ったのである。

大学デビューというのとは違う。遊び倒すつもりなど毛頭なかった。実際、授業を休むこともなかったし、毎週のように飲み会に出るということもなかった。

ただ、ひたすらに着飾った。

春は黄色だ。

そう決めたら、毎日イエローを使った服で、一度たりとも同じ服を着ることなくゴールデンウィークを迎え、連休明けにはブルーで臨んだ。もうこれ以上、青で決めるのは難しいという限界ぎりぎりまで、青い服を選び続けて前期を終えた。

母さんは

「オネエに目覚めないでね」

といい、父さんは

「おしゃれだなあ」

とだけいていた。

後期が始まる直前のこと。

秋は赤で決めようと思っていたし、すでに数着は買っていた。夏休みに集中的にバイトをしたので、資金も潤沢にあった。

着慣れぬ服は、格好が悪い。

そんな理由もあり、近所の図書館に買ったばかりの服を着て出かけた。

「ねえ……」

子どものささやく声が聞こえた。

ふりかえると、小学生くらいの女の子ふたりがこちらを見ていた。

怪しい者を見る目。社会から浮き出た者をいぶかしがる目だった。

「あ、戦隊マンだ！」

別の方向から、男の子たちの声がして驚く。

戦隊マン、だと？

「俺知ってるぞ、あのイエローとブルーとひとりでやってたんだ」

なるほどー。

笑いながら、図書館から駆け出していく子どもたちを見送り、俺はため息をついた。

その日を境に、服飾への興味は急速に失われていった。

何を着ても、お笑いにしか見えなくなった。

春先、あれだけこだわっていた黄色は、どの服を手にとってもダンディーしか連想できなかった。青い服は、三人組のパフォーマーしか思い浮かばない。

おしゃれでもなんでもなく、ただ目立つための記号でしかない。

自動車のセールスマンになった今は、無難なスーツしか着ない。

モノクロだった父さんと同じだ。

そして、ディーラーの外を歩く派手な男をみるたびに思う。

若いな、と。

自分が枯れたとは思わない。ただひとつ気づいたことがある。

おしゃれは一人でできるものではなく、そういう多様性を認める社会でなければ痛いだけなのだということ。

そういう現実を受け入れて、黙々と同じスーツを着続けた父さんはすごいな、と今さらながらに思うだ。

## Father's suit 茶屋

でね、そのスーツを着ると父になるらしいよ。  
父ってなんだよ。父って。  
あ、あれ？なんだろう？そういえば。  
そこ大事だろ。そんなんだから課長に怒られんだよ。  
そうかな。  
そうだよ。  
で、その噂がどうかしたのかよ。  
あー、なんかさ。  
何だよ。  
ちょっと待って今思い出す。三分待って。  
長いよ。  
じゃあ一〇秒。  
いきなり縮まったな。  
あ、そうそう、それ、俺、何か昨日さ。玄関の前にあったの。  
は？  
いやだからさ。玄関の前にあったの。  
何が？  
スーツ。  
へ？  
父のスーツ。  
いやいやいやいや。意味分かんないから。  
え？そう？  
何、その、父のスーツってのがお前の玄関先に、突然置かれてたわけ？  
うん。そうそう。  
何で分かんだよ。それが父のスーツだって。  
だって父って書いてあったし。  
待って。スーツに父って書いてあったの？

うん。

いや、だからってそれが噂の父のスーツとは限らないっしょ？

いやでもさ。それっぽくない。

着てみた？

まだ。でもさ。実はさ。

何？

持って来ちゃった。

マジで？何で？何で持って来ちゃった？

これなんだけどさ。

おおー。ってあー、スーツってビジネススーツじゃないのね。

うん。スーツっていうより潜水服？

うおマジだ、父って書いてある。

着てみん？

俺が？俺が？何俺実験台？

いいからいいから。

よくねえよ！

いいからいいから。

ちょ、ま

いいからいいから。

まって、まって、コイツ生きてる。何か動いてる。

いいからいいから。

何か触手みたいなのついてる。刺、あ、痛っ

大丈夫大丈夫。

や、め、いたっ、わ、が、お

大丈夫。父になれば苦しみから開放されるから。

が、げごぼお、げはっ

痛いのは最初だけだから。

お、まえ、だれ、

僕？僕も昨日ね、父にね、父の意志と一緒にね、なれたからね

父はね。ほんとにね。素晴らしいんだよ。

どう？すごいでしょ。父って。

ねえ？聞いている。

あれ？失敗したかな？

ま、いっか。

## 父のスーツ

鳥居三三

「かつて我々は地球と戦ったのだ」と先生は言う。授業をうけている自分からすればあまり実感はない。ここが地球でないのはわかっている。「地平線」はここにはない。地面を辿れば視線は次第に上にいくことになり、雲は通り過ぎてはいくが、また戻ってくる場所を確認できる。しかもその雲はある程度こちらの都合で調整可能だ。空の上に家や建物があって、さらに地面があってもそれはごく当たり前のことだと思っていた。

ただ、自分はここ以外の場所を知らない。教科書のデータには、どこまでも広がる海の風景や、少し前までの独裁国家と威張りちらした国ともいえない主に地球の集団との「ケンカ」の話、そしてその「ケンカ」の中で生まれた新兵器のめまぐるしい活躍についての話がたっぷり詰まっているが、どれもそれを切羽詰まった話として実感することができない。

特にこの場所は、いまでは大きな「船」の航路があるわけでもなく、ちっぽけな連絡船が忘れない程度にたまにくるぐらいのところ、自分でいうのもなんだかすっかり田舎だ。

もうすこし都会に出てみればわかるのかもしれない。しかしながら牧場と廃品回収業と生業とする一家の長男、でも片親で母しかいないという、都会だったらすぐにややこしい家庭事情を探られそうな家の事情がある。結局のところ、あと2年もしたら大学なんぞには行かずとっとと家業をやってくれ、と宣告された立場では、将来仕事で出かけることはあっても、遊びに繰り出したまま4、5年ぐらい真の自由の探求のための放蕩、平たく言えば大学生活を送りたいといった類は体験させてくれないのだろう。前ならケンカして口をきかないでいる余裕もあっただろうが、若いなりには、データや書物からどうにか理解する「現実」やら家族愛やらにほだされる裏にある現実を考えると、心にブレーキがかかるぐらいには臆病であったり。

まあ、あと、単純に遊びにいくなら、地球に行くより月面の都市で遊ぶほうがよっぽど近いし、それで事足りている。

新兵器、と先ほど言ったが、具体的にいうなら人型のロボット兵器のことだ。中に人が乗り込んで殴り合いをする。たまに打ち合いをする。でもかなり遠くから狙うとか、電子機器を存分に使った遠距離攻撃ができないといった有り様で、「結局人類は地球を離れて宇宙に来てまで、スーツを着て原始的な殴り合いをすることしかできなかったのだ」と、終戦時の独裁国家、つまりこちら側の「責任者」が発言を残している。総統も首相も将軍もすべて狩られてしまったので、最後に残ったのが「責任者」という名前になっている、とは何度も聞いたが、いつもそれを言う度に先生や親戚が、なんともみじめなことだという顔をしたり言葉を聞くので、正直この話が本当に苦手だ。うんざりする。

先生は続ける。

「この人工居住地域にも敵はやってきました。その『船』の数は20隻から25隻とされています。そしてそこから出てきたスーツは500体以上。それに対してこちらのスーツは10体しかありませんでした。しかし見事敵を殲滅したのです。そのスーツに乗り込んでいた10名の名前を、今日はもう一度復唱しましょうね」

この授業はうんざりだ。でも、復唱するところはそうでもない。  
実は、少々照れくさい。

今はいない、父の名前がそこにはあるから。



投稿時刻 : 2013.09.21 23:26

最終更新 : 2013.09.21 23:33

総文字数 : 1709 字

獲得☆ 3.333

《てきすとぼい杯の未来で賞》

みたびかよたびかわすれましたが  
しょうせつのかきかたをわすれました。

ひやとい

東京のとある貧民層窟に、日雇いくんという人が住んでいました。

日雇いくんは基本的には小説が好きなのですが、飽きっぽい上に気まぐれなので、最近是将棋倶楽部24でネット対戦ばかりしていて、すっかり小説の書き方を忘れてしまいました。

そんな日雇いくんをさておき、ネット小説界ではてきすとぼいがしみじみと隆盛、主催杯も第8回を迎え、老舗の投稿サイトとして十年続いたアリの穴もなくなった今、次世代投稿サイトとしての役割を果たしつつあるところでした。

ある日、日雇いくんはよせばいいのに将棋を6時間も指し続け、おまけに負けてばかりいてすっかり疲れてしまったので、気分転換にツイッターを見ることにしました。

すると、『第9回てきすとぼい杯』の文字が見えました。

「あっ、そういえばそんなものがあつたなあ。たまには書いてみるかあ。なんたって本業だもんね」

誰にも認められていないというのに、日雇いくんはどういうわけか、十年前から小説を書くのが本業だと勝手に思い込み、親兄弟や友人に迷惑をかけ続けていました。

しかしあまりに認められないので、ついには小説どころか人生にも飽き、もういつ死んでもいいやでも痛いとか苦しいとかはやだなあラクしてトクしてイタダきたいなあ、好き勝手なことをほざいていました。「ようし、たまにはこの超絶技巧の俺様が書いてやるかあ！ 皆の者、傑作を眼前に出来る事をありがたく思え！」

ということで日雇いくんは、お題を見てみました。

「父のスーツ？ ……………さすがの俺様も、このお題で面白いものが、果たして書けるもんかなあ」

日雇いくんはとりあえずお題に沿ったものを考えてみましたが、洋服の青山がどうしたとか、都営荒川線沿いを歩いた時コナカで見た洋服が安かったなあとか、その店の前に置かれていた服を持ってそのまま逃げればうまいこと手に入れたれたかもなあとか、あああの時自転車乗ってりゃよかったとか、とにかくろくなことを思いつきません。

「もういいや！ お題が悪いしめんどくなつたし寝よう」

加齢による衰えと勉強不足を棚に上げ、日雇いくんは睡眠薬を飲むとそのまま寝てしまいました。

次の日、夕方まで寝ていた日雇いくんは起きるとすぐ将棋倶楽部24で将棋を指しましたが、やはり負けまくってばかりいるので飽きてしまい、いやらしい無料動画を堪能した後、ふと、ぼい杯のてきすとぼいを思い出しました。

「ああ、そういえばぼい杯どうなったっけ」

さっそくページを見てみると、みんな普段から書き慣れているだけあって、どれも出来のいいものばかりでした。

しかし日雇いくんは性格がひねくれまがっているのです、素直にみんなの出来を認めることができませんでした。

「ふん！ 俺様が本気出せば、こんなのより面白いもの書けるわ！ 死ね！ 死ね！ みんな死ね！」

日雇いくんは怒りを顔にすると、そのままふて寝してしまいました。

そして数日が過ぎた頃、てきすとぼいでは第9回の結果発表が行われました。

「ああやっぱりあいつか。出来がよかったもんなあ……」

あいかわらず将棋で負け続けた後ツイッターを通して結果をみた日雇いくんは、人の成果を否定した事も忘れ、しみじみと優勝作の出来を思い返しました。

「父のスーツ……チッチのスーツだったらよかったのになあ。」

普段からくだらないダジャレを言ってまわりを辟易させている日雇いくんはそう口ずさむと、小学生の頃お姉さんが買ってきたちいさな恋の物語の何巻かに出てきた絵を思い浮かべました。

すると、こんな疑問が湧きました。

「チッチって、スーツ着てたことあったっけ？」

さっそく日雇いくんは、インターネットもといインターネットで有名なグーグルというサイトに行きチッチのスーツについて検索を開始ようするにぐぐることにしました。

しかしあまりに写真が多すぎてめんどくさくなってしまい疲れてしまったので、もういやとふて寝してしまいました。

「考えてみたら、そんなこと知ってもどうでもいいもんな。ちっちって感じだぜ」

日雇いくんは右手人差し指を左右（寝ころがってしまっていたので上下かもしれませんが）に振ると、そのまま翌日の夜までぐっすりと眠ってしまいました。

めでたしめでたし。

## 終わりに

---

てきすとぼい杯、第9回は、お題を「父のスーツ」といたしました。これは舞台・状況がやや限定されるお題でしたようで、ご参加の作者さまからも「ネタが被りそう」「お題だけで父死亡フラグ」などのご意見があり、競作としては、少々執筆しづらい回だったかと思えます。

そういった中で、ネタ被りを恐れず持ち味を発揮した作品に、全体として高い評価が集まった印象がありました。いかがでしたでしょうか。

また今回は、直前회가「夏の24時間耐久」ということで制限時間を長めにしての開催だったこともあり、1時間15分制限はやはり短い！という感想もございました。

一方で審査結果を振り返りますと、過去最高の☆票を獲得した作品が2作品も登場し、また作品字数の最多記録が、記録保持者によって大幅に更新されるなど、作者ごとに作品の個性がより一層はっきりと表現された回だったのではないかと感じております。

――最後になりますが、今回も非常に愉快で読み応えのある作品をお寄せくださった作者の皆さま、投票・感想・チャット会にご参加くださった皆さまに、この場をお借りしてお礼申し上げます。

てきすとぼい杯は、引き続き毎月中旬に開催予定でおります。

お時間ございましたら、またぜひ、投稿にも審査・感想にも、お気軽にご参加くださいませ。

2013年10月14日  
てきすとぼい杯 運営担当

※なお、次回てきすとぼい杯は、2013年10月18日(金)開催の予定です。



作品集電子書籍を  
Puboolにて頒布中。

# 言葉の茂る 樹が育つ。



概ね実話です

作者さんの作品解説  
聞きたいですね

蜜柑の匂いが  
してくるようですね

若干テーマの  
ぶれのようなものを  
感じました

恋愛系の作品が  
多かった印象

ほのかなえろすを  
感じました

ラノベタッチな  
感じで軽快で  
みやすい

この世界観で  
300枚くらい  
書いて下さい

競作・共作  
テキスト創作サイト

**できすとぽい**  
text-poi.net

これにしても、  
投稿時刻が驚異的!

読んでいて時々、  
すごく言葉が刺さったり、  
強く共感してしまったり

前衛的ですね。  
私も結構こういうの  
好きです

よくあるパターン  
なだけで  
「ベタだなあ」と  
感じさせない筆力

読んで  
ドキドキ  
しました……

このお題消化法は  
正直やられたーと  
思いました

そういうこそ、  
Kindleで出版したら  
いいのに

予想外の結末に、  
「ええっ!？」って  
声出ちゃいました

適度な緩急、  
リズム感があって  
とても良かった

なんか直すと他の  
ところのバランスまで  
崩れちゃうような

できすとぽいは、競作や共作を支援する  
テキスト創作サイトです。一人ひとりのウエブ  
作家たちが、競作・共作を通じて結びつき、  
感想やアドバイス、採点などをかわしながら、  
よりよい作品を創ることを目指しています。  
作家同士が言葉を交わしあい、言葉のやり  
とりが豊かに茂り広がっていく。そんなサイ  
トにあなたも参加して、一緒に創っていきま  
せんか?  
いまはまだ、小さく芽吹いたばかりですが、  
いつかきつと言葉の大樹になると信じて。

てきすとぽい杯作品集  
〈第9回〉

<http://p.booklog.jp/book/77920>

編集まとめ : てきすとぽい

<http://text-poi.net/>

てきすとぽいプロフィール

<http://p.booklog.jp/users/textpoi/profile>

表紙デザイン : 蟹川森子

てきすとぽい杯コピー : 茶屋休石

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77920>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77920>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー

<http://p.booklog.jp/>

運営会社 : 株式会社ブクログ



てきすとぼい杯